

科学者に委ねてはいけないこと

岩波書店

このページを開いている若い人のなかには、2011年3月12日の東京電力福島第一原子力発電所の一号機の爆発事故を、リアルタイムでの出来事としては、記憶していない方もいらっしゃるかもしれません。東日本を襲った地震と津波の翌日、前夜から危機的な状況に陥っている原発はどうなってしまうのか、私もテレビに釘付けになっていました。

何の前触れも説明もなく原子炉建屋を吹き飛ばす爆煙の映像。骨組みだけになった建物上部。そこで何がおきているのか、これからどうすればよいのかを教えてはくれない専門家。それまでの考えを根底からひっくり返す衝撃的なできごとでした。

(NHK スペシャル「メルトダウン」取材班「メルトダウン 連鎖の真相」講談社) そしてテレビに映らないところでは、自分たちにどんな災厄がふりかかっているか知らされないままに、多くの人びとが放射能にさらされていたのです。(広河隆一「福島原発と人びと」岩波新書)

大学で数学を教えているくらいなら原発のしくみについてもよく知っていたはずだと思われるでしょう。原発がいろいろな問題を抱えていることを知識として知ってはいても、それがもつほんとうの意味には目をむけずにいました。絶対安全という説明は信じられないとしても、それが目の前でなすすべもないままに崩れていくのを見ることになるとも思っただけで済ませませんでした。

科学と科学者によせる人びとの信頼も、原子炉建屋とともに崩れていったように私には感じられました。原発の安全神話を作りあげた末に過酷な事故を招いたこと、そして事故の実態と放射能の危険性についての情報がもっとも必要とされるときに適切に提供されなかったこと、事故から4年が経とうとしている今も、信頼は崩れたままに放置されていると私は思います。

福島では今も十数万人もの人が住み慣れた土地に帰ることができず、もっと多くの人びとが放射能の危険

にさらされながら、事故以前とはすっかり変わってしまった日常のなかで不安とともに暮らしています（朝日新聞特別取材班「生きる 原発避難民のみつめる未来」朝日新聞出版）。

その一方で東京にすむ私たちは、200キロ北での現実から目をそらしさえすれば、原発事故の前と同じように、問題など何もないかのようふるまうことができるのです。

科学を学ぶということは、使い方を誤れば、これほど重大な結果をもたらし、これだけ多くの人を不幸に陥れる力を手にするという事です。それを防ぐためには、私たちに何ができるのでしょうか。原発事故とそれに続いて起きたことからみえてきた、科学と科学者が抱える問題が、ここにあげた本ではさまざまな視点から論じられています。

限られた一部の人や組織が知識を囲いこむことで権威を作りあげると、そこから疎外された人はよわい立場におかれてしまいます。原発事故とその被害の拡大の根源は、そうした

人びとに危険をおしつけるしくみの中にあった、と私は思っています。

最高学府とよばれる東京大学は、この知の権威による権力のしくみを支えてきたし、いまでもそれは続いていると思います。科学と科学者への信頼をとりもどすためにも、原発事故をくりかえさないためにも、このしくみの再生産を止めなくてはなりません。

これがこの本に原稿を書くか書かないか最後までためらった理由です。どの大学にも数学を勉強したい新生がいるはずです。それどころか、数学は大学の外でもできるのです。東大新生という限られた人ではなく、数学をもっと知りたいすべての人におすすめしたい本を紹介しました。

すらすら読めるものではないですが、数学の本は一步一步読み進めれば違う世界を見せてくれます。数学の世界にふれながら、原発事故のあとで数学を学ぶことの意味も考えていただければと思います。